

# 明・清時代の北京城の都市計画と構成配置のもつ意味

唐 曉峰

北京大学歴史地理研究センター

元の末、モンゴル政権に反抗する蜂起が相次ぎ、全国各地を席卷した。長江（揚子江）下流一帯で勢力を伸ばし続けた朱元璋が、国土の半分にあたる長江以南を手中に収めた。至正27年（1367年）、朱元璋は麾下の徐達と常遇春の2将軍に兵を率い北部を討伐するように命じ、翌年の7月、徐達将軍は諸軍を大運河の重要な拠点である臨頭に結集し、徳州、通州等を攻め落とし、元王朝の心臓部である大都に迫った。明の洪武元年8月2日（西暦1368年9月12日）、明軍は大都に進攻し占領した。元の順帝・トゴンティムールは后妃や太子、それに一部のモンゴル人大臣と共に、健徳門から北に逃亡した。ここに、98年間続いた元王朝による中国統治が終わりを告げた。

徐達は、元の大都を攻略した後、大都を北平と改めた。この時、元の順帝はモンゴル高原に敗走したとはいえ、依然として大元皇帝を名乗り、南下侵攻の機会を窺い、再び皇帝の座を奪還する考えを抱いていた。明軍は大都を占領した後、防衛強化をはかるため、大規模な大都改修工事に着手した。もともと、大都城内の北側は広々とした一画であったが、長年の戦乱による人口流出も重なって、一帯は荒れ果てていた。

明王朝は、北平城を建設するにあたり、荒廃した北の一画を放棄し、大都時代の北側城壁から南に約2.5キロメートルの所に、積水潭の水を東に引く水路の南岸沿いに、新たな城壁を築いた。この新しい城壁は、西に向かって積水潭の最も狭いところを横切ったところで、南西に向かって斜めに屈曲する。北側の城壁には、2ヶ所に北門が設けられた。東寄りが安定門、西寄りが徳勝門である。このようにして、明代北京城の北の境界が定まった。

このほか、明代の初めに、東城壁の崇仁門が東直門と改名され、西城壁の和義門が西直門と改名された。正統元年（1436年）に9ヶ所の門の造営が始められ、正統4年（1439年）に完成した。これに伴い、麗正門、文明門、順承門、齊化門、平則門も、それぞれ、正陽門、崇文門、宣武門、朝陽門、阜成門と改名された。9つの門の名称は、そのまま今日まで伝えられている。また、風水の考え方から、明王朝は元の「大内裏」を全て取り壊した。

洪武3年（1370年）、朱元璋は第4子の朱棣<sup>しゅてい</sup>を北平に封じて燕王とし、北方に対する守りを固め、モ

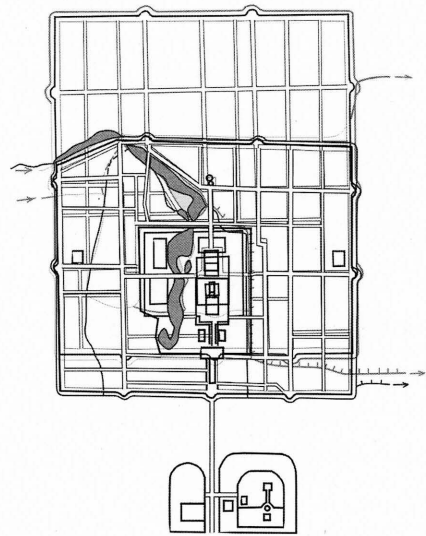


図1 元・明時代の北京城址の変遷

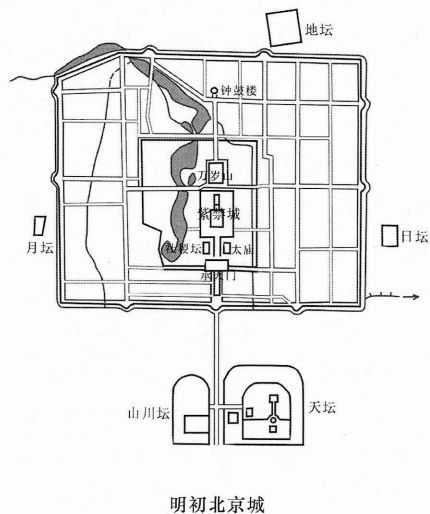
ンゴル族の南下侵攻に備えた。燕王府は、元王朝の隆福宮の跡地に設けられた。洪武31年（1398年）、朱元璋が逝去し、孫の朱允炆が帝位を継ぎ、年号を建文とし、明の恵帝となった。建文元年（1399年）、朱棣は奸臣を除くことを名目に、当時の都であった南京に向かって兵を進めた。世に言う「靖難の役」である。4年にわたる戦の結果、朱棣は甥の手から帝位を奪い、年号を永楽と改めて、明の成祖となった。

成祖・朱棣は即位後、大きな脅威は依然として塞外（訳注：万里の長城の外側、主にモンゴル草原のことを指す）のモンゴルから来るとして、モンゴルの各部に対して懐柔と防衛の二本立政策をとる一方で、北平に遷都する準備を進めた。遷都の目的は、モンゴル人の南下襲来への備えの強化と東北地方に対する支配の強化にあった。朱棣は、手はじめに北平を北京と改め、続いて北京城再建の大規模土木工事に着手した。しかし長年の戦乱で、北京城内の人口が減り、街は寂れていたのも、江南や山西から多数の富豪を北京に集めた。北京付近の農村部も同様に荒廃し、田畑は荒れ果てていたのも、外地から土地を持たない、あるいは僅かの土地しか持たない農民を入植させて耕作を奨励した。犯罪人を北京近郊に屯田させ墾墾を進めることすらした。

永楽4年（1406年）から宮殿の造営に着手し、城壁を築いた。同5年（1407年）、四川、湖広、江西、浙江、山西等の各地に大臣を派遣し、宮殿造営用の木材を調達させた。当時、職人23万人と百万人以上にのぼる人夫と兵士が宮殿造営工事に動員された。北京城の建設は、永楽4年から始められ、14年の歳月を費やして、永楽18年（1420年）にほぼ竣工した。

明代の初めに建設された北京城は、元の大都を土台として引き継ぎ、それに新しいものを付け加える形で建設された。元の大都城は厳密な計画に基づいて建設されていたが、その最大の特徴は、立地条件に合わせて、現在の什刹海（当時の積水潭）の東岸に隣接させる形で、都市設計上の中心軸を定めた点である。中心軸の方角は、古くからの慣わしで北から南方向と決まっていた。このため、現在の鼓楼のある場所を北京城全体の中心軸の起点として選び、そこに「中心台」、「中心閣」が建てられた。それが、大都城全体の平面配置構成上の中心となった。

明代初めの大都城改造事業では、まず、居住者の少なかった城内の北部の一角が縮小された。元大都の北側城壁から南に2.5キロメートルの所に新しい北城壁を築き、これによって、今日の安定門と徳勝門を結ぶ東西のラインの位置が確定した。その後、さらに城内南部を拡張し、旧城の南約1キロメートルのところに、新しい南城壁を築いた。これにより、今日の崇文門、正陽門および宣武門を結ぶ東西ラインの位置が定まった。このように、明代の北京城になって、北と南の城壁の位置が変わったため、全体の平面配置をみると、元の大都城が「中心台」を城全体の中心点とした構図が姿を消し、北京城全体の



明初北京城  
図2 明代初めの北京城概略図

新しい中心点が南の万歳山の位置に移った。

明代の紫禁城は、元代の宮城跡地に、新たに設計および造営された。両者を比べると、明代の紫禁城は、元代の宮城「大内裏」跡よりやや南に位置をずらしている。しかし、東西両側の城壁の位置は変えず、北側を削り、南側を延長しただけであったため、明代の宮城も南北に縦長の長方形を保ち、依然として北京城全体の中心軸上の重要な位置を占めていた。

紫禁城が南に移動したことにより、元代の後宮であった延春閣の跡地が紫禁城北側の城壁の外に出た。風水の考え方にに基づき、延春閣の跡地に、城の濠や南海を掘った土を用いて築山を築き、万歳山と名付けた（清代初めに景山と改名）。一般には「煤山」と呼ばれた。万歳山の中央の峰が、丁度、延春閣の跡地に位置した。明代にその跡地に築山を築いた目的は、前王朝の「風水」を封じ込めることにあった。そこで、この山は、別名「鎮山」とも呼ばれた。北京城全体の平面配置構成上、万歳山はさらに重要な意味を持っていた。万歳山の中央の峰が、古い大都城の「中心台」に代わって新しい北京城の中心点となったということである。万歳山の中央の峰は、北京城全体の中心軸上に位置するばかりでなく、北京城の南北両城壁の真ん中に位置した。人為的に選定されたこの要所は、宮殿造営上は特に目立った実用的価値を有した訳ではなかったが、極めて象徴的な意味をもっていた。それは、幾何学的図案にも似た精密でシメトリカルな北京城の平面デザインに、聳え立つ1つの実体を配することによって、帝王の至上性と尊厳を表わそうという試みであった。

さらに、紫禁城の南への移動によって、紫禁城是北京城全体の中心軸上の重要な位置をそのまま確保することができた。また、宮城の周囲に広い濠を掘ることが可能となった。濠の造営は紫禁城の防御能力を高めた。さらには、濠の水を紫禁城の北西の角から暗渠を通じて城内に引き込むことによって、西側の城壁沿いに南に向かって流れを作り、午門の前を通過して最終的に南東角の暗渠から外の濠に流れ込む、いわゆる「内金水河」が作られた。内金水河の下流は、太廟東側の城壁の外を南下して、「外金水河」に合流したあと、向きを東に転じて通恵川に注ぎ込んだ。この内金水河の開削は、北西から南東に向かって約2メートル低くなる自然の地形傾斜をうまく利用していることから、開削工事の際には事前に精密な測量が行なわれたものと思われる。

紫禁城内の内金水河は、重要な実用的役割を有していた。北京地方の気候の特徴は、例年、夏に降雨が多く、しかも短時間に集中的な豪雨がよく発生することである。このため、排水がスムーズに行なわれないと、すぐに河川が氾濫し災害につながった。紫禁城内は、大小の建物が軒を連ね、地面の大半はレンガや石が敷きつめられていたが、豪雨が降ったときでも、雨水は内金水河を通じて城外に排水された。また、火災やその他大量の水を必要とする事態が発生した場合でも、内金水河によって水の供給が十分に確保できた。このように、内金水河は洪水防止、防火面で大いにその実用的機能を発揮した。

紫禁城の南門である午門が、宮城の正門である。午門の内側に金水橋がある。金水橋の北側に新たに皇極門が作られた。皇極門の内側には、まず皇極殿が建てられ、続いて中極殿と建極殿が建てられた。これらが外朝の三殿である。その奥にあるのが、いわゆる内廷の後三殿と呼ばれた乾清殿、交泰殿、坤寧殿である。これら後三殿の名前は、清王朝まで変わらず使われた

が、前三殿は清代になって太和殿、中和殿および保和殿と改名された。

これら前朝と内廷をあわせた6棟の建物は、全て北京城の中心軸上に建てられ、最も重要な位置を占めていた。前後6棟の建物は南と北の2組の宮殿群に分けられるが、互いに遠く離れているわけではなく、2組の宮殿群は回廊で結ばれ、均整のとれた配置がなされ、緊密な連繫を生み出す空間となっている。宮城の東西両側の城壁には、東華門と西華門が設けられ、宮城の厳重な警護がはかられた。後三殿を北に抜けると御花園に出る。庭園の中央には欽安殿が設けられている。さらに北に進むと紫禁城の北門である玄武門（清代に神武門と改名）がある。門は北側の万歳山と正確に向き合っている。

明王朝は、太廟（訳注：皇帝の祖廟）と社稷壇（訳注：社＝天地の神と稷＝五穀の神に五穀豊穰、国平安を祈るとき、行事が行われる祭壇）をそれぞれ紫禁城南門の外の左右両側に建て、「左祖」（訳注：宗廟は左に建てる）、「右社」（訳注：天地を祭る社は右に建てる）という古いしきたりを守った。さらに、皇城を造営するにあたり、太廟、社稷壇および新たに開削した太液池南端の湖水などを全て皇城内に収めた。皇城は、北京城の内城中央に位置し、紫禁城を取り囲んでいた。皇城には4ヶ所に門が設けられた。それぞれ、南の承天門（清代に天安門と改名）、東の東安門、西の西安門、北の北安門（俗に厚載門と呼ばれた。清代に地安門と改名）である。皇城の城壁は中華民国元年に取り壊された。今日まで伝わっている「東皇城根」、「西皇城根」、「西安門」、「東安門」等の地名から、当時の皇城の範囲をおおむね推定することができる。

紫禁城、皇城および北京城の各城壁の間は間隔が広く、紫禁城の南門である午門前方の中心御道の両側には、太廟と社稷壇が厳密な対称性をもって建てられていたので、午門と皇城南門である承天門の間の一画全体が宮殿造営の全体計画の中に組み入れられることになった。これによって、中心御道の存在がいつそう明瞭になった。

承天門（清代初めに天安門と改名）前にT字形の宮廷広場が作られた。広場は東、西、南の三面にめぐらされた城壁によって完全な閉鎖空間となっていた。東西両翼および南に突き出た部分にそれぞれ門が設けられた。東が長安左門、西が長安右門、南側が大明門（清代初めに大清門と改名）である。大明門から東西両城壁の内側に沿って千歩廊が作られた。北の端で、千歩廊は城壁に沿ってそれぞれ方向を東と西に転じた。中間の直線的な中心御道が、大明門から北に向かって承天門まで真直ぐに延びていた。この宮廷広場は、皇城の付属部分とすることができる。

明の永楽元年、長年の戦乱で北京の商業地区はことのほか寂れていた。このため、明朝政府は皇城の外側にある鐘鼓樓、東四牌樓、西四牌樓および北京城の各城門付近に、数千戸の民家と店舗を建設し、住民と商人を集めて住ませた。こうした建物を「廊房」と呼んだが、それが明代の北京城住宅街の基となった。明代前期、北京城の四方を囲む城壁の補強が段階的に進められた。元代の大都城の城壁は土をつき固めて築かれていたが、この時期に全て城壁専用レンガを使って築き直され、城門のトンネルもレンガ作りに改められた。城壁上に樓閣を築いたほか、城門から濠を跨いで外に通じる木製の橋も全て石橋に架け替えられた。

明朝は、北京城の四面に天、地、山川、日、月を祭る5つの祭壇を次々と建て、北京城を宇

宙的象徴で満たした。天壇の造営工事は永楽4年（1406年）に始まり、14年の歳月をかけて永楽18年（1420年）に完成した。天壇は面積273ヘクタールという紫禁城の何倍もの広さを有していた。このことは、皇帝を中心とする朝廷が天を祭る行事をいかに重んじていたかを物語っている。天壇は、二重の壁によって、内壇と外壇に分けられた。二重の壁はいずれも北側が半円形で、南側は四角形になっている。天壇内の主要な建物は、どれも平面的にみると上部が円形、下部が四角形をしている。これは、古代の人々が「天は円く、地は四角い」と考え、天を円で表わし、地を四角で表わしたからである。

明代の初め、天壇は洪武帝の天地合祀の制を守って、天地壇と呼ばれていた。明の歴代皇帝は、毎年冬至の日がくると、天壇に行き天を祭る式典を執り行なった。

天壇の南側にある圜丘<sup>えんきゆう</sup>は、天を祭る祭壇であった。昔の人々は、「天は円く、地は四角い」という説を信じていたので、高く積み上げた圜丘<sup>えんきゆう</sup>を築き、天を象徴させた。また、天は高いところにあるので、その上には一切の建物を置かず、「露祭」と称した。圜丘<sup>えんきゆう</sup>の真ん中に立って声を発すると、音声が増幅されて声が大きくなる。古建築の傑作と呼ぶに相応しい精巧な仕掛けであった。

北京外城の南、天壇の西には、山川壇が天壇と向き合うように建てられた。山川壇は、太歳（訳注：木星）、風、雲、雷、雨、海、山などの神を祭る場所であった。天は南の城外に祭り、地は北の城外に祭るのが、中国古来のしきたりであった。嘉靖9年（1530年）、天と地を分けて祭ることが定められ、従来の天地壇は、名を天壇と改められ、天のみを祭るものとされた。そして、北の安定門の外に、地を祭る地壇が別途建てられ、南の城外の天壇と相対した。嘉靖9年、さらに、東の城外に日壇が建てられ、太陽神が祭られた。また同年、西の城外に月壇が建てられ、月の神が祭られた。

明代中期、モンゴル騎馬兵がたびたび南下してきて、時には北京城外まで迫り、北京の安全を脅かした。明の世宗・朱厚熹は諸大臣の献言を採用して、新たに外郭の城壁を造営し、北京城の防衛強化をはかった。嘉靖32年（1553年）には、南の城外一帯を囲む外羅城を築いた。

すなわち、昔言われていた北京外城である。もともとの計画では、北京の内城も四方全てに外郭の城壁を築くことになっていたが、後に財政上の理由から、南の城外一帯を囲む城壁のみが完成されたのであった。外城の造営により、天壇と山川壇も外城の範囲内に納まることになった。また、北京城は平面配置構成上、特徴的な凸字形の輪郭を持つことになった。外城の南側には3ヶ所に門が設けられた。中央が永定門、東が左安門、西が右安門である。東西の側面には、各々1つの門が設けられた。東が広渠門、西が広寧門（現在の広安門）である。さらに北東と北西の角にも、それぞれ1つの門が設けられた。東便門と西便門である。これら7つの城門の名前も今日まで伝えられている。

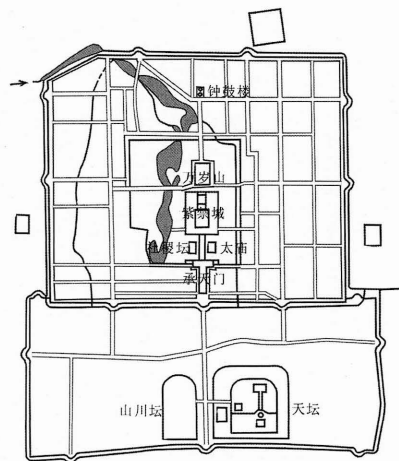


図3 明代北京城の内城と外城のレイアウト

付け加えれば、外城に含まれた居住区は、築城計画の対象から外れたため、全体として道が狭く入り組んだ街並となったほか、南西から北東の正陽門前に通じる斜めの通りが何本かできた。こうした外城の様子は、通りや街並が整然と並ぶ内城と明らかに趣を異にした。

外城の完成にともない、正陽門の南側を基点として、東西に向き合う天壇と山川壇の間を抜け、永定門まで伸びる1本の直線通りができた。この通りは、北京内城の中心御道の延長であり、北京城全体の中心軸でもあった。この中心軸は、永定門を起点として、北に向かって紫禁城の中心と景山の中央の峰を通り、最終的に鼓楼・鐘楼に達するもので、全長8キロメートル近くに及んだ。この中心軸は北京城の平面的配置構成の中心を示し、皇帝の宮廷が城全体の中心に位置することを際立たせ、帝都の設計理念を具現していた。中心軸およびそれを基本として生まれた東西対称という都市配置構成は、北京城を平面的に見た場合の最大の特色である。

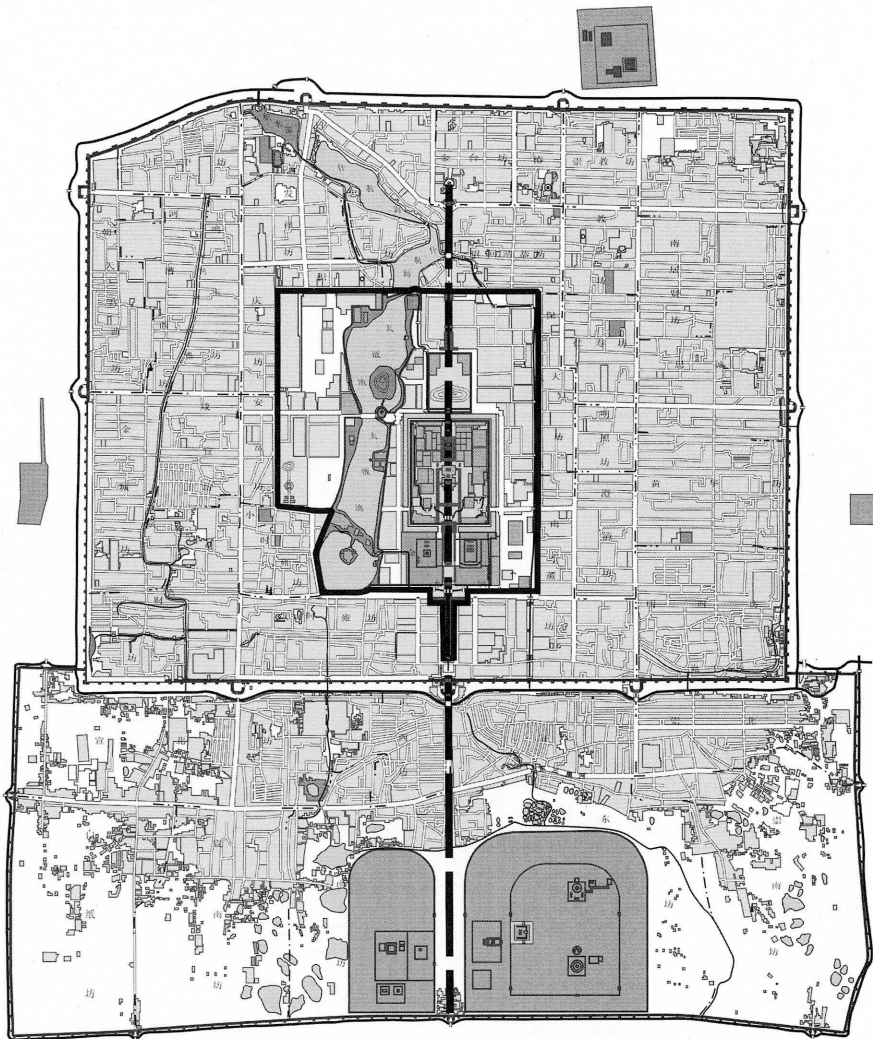


図4 明代における北京城の中心軸

明代の北京城内で最も目立ち、最も堂々とした建築群は、全城の中心に位置し、金色に輝く皇居宮殿である。明代の皇居宮殿は、建築構成上、周到な設計に基づいて造営された。皇帝権力の至上性という中心コンセプトを具現し、皇居宮殿としての荘厳さと雄大さを備えた雰囲気を醸し出すため、正陽門から皇極殿に至る南北約1700メートルの中心軸上に、威風堂々とした、また荘重な趣を有した大明門、承天門、端門、午門そして皇極門（清代に太和門と改名）が順次建てられた。それによって創られた大きさ、形状の異なる6つの閉鎖空間が、限られたスペースに多様性と変化を生み出した。

正陽門から北に向かって、やや規模の小さい大明門を通り抜けると、T字形の宮廷広場に出る。宮廷広場は宮城と北京城の間に広がる空間である。ここは建築構成上、周囲をより際立たせると同時に緩衝的な役割を担った。さらに独自の実用的機能も備えていた。広場両側の城壁の外に、各官庁が集中して配置された。東側には宗人府（訳注：宮内庁にあたる）、吏部（訳注：文官の任免賞罰等の人事を管掌）、戸部（訳注：土地、戸籍、税務、財務を管掌）、礼部（訳注：式典、祭儀、教育、科挙試験等を管掌）、兵部（訳注：軍事および武官人事等を管掌）、工部（訳注：土木事業を管掌）、鴻臚寺（訳注：外交、朝貢使節の接待等を管掌）、および欽天鑑（訳注：天文气象台。暦の作成、時刻の測定業務を管掌）などが置かれた。西側には、五軍都督府（訳注：最高統帥機関）、太常寺（訳注：宗廟にかかわる礼儀を管掌）および錦衣衛（訳注：宮城警備と警察権を管掌）などが置かれた。これらの中央行政機関が宮廷広場を通じて宮城と一体化する配置構成によって、封建時代の皇帝が有する最高権力が象徴的に表わされたのである。

さらに、宮廷広場で定期的に繰り広げられる盛大な各種政治行事が、一切の主宰者たる皇帝の権威をいっそうはつきりと示した。例えば、官僚採用試験制度である科挙の最上級試験は、紫禁城の保和殿内で実施され、「殿試」（訳注：

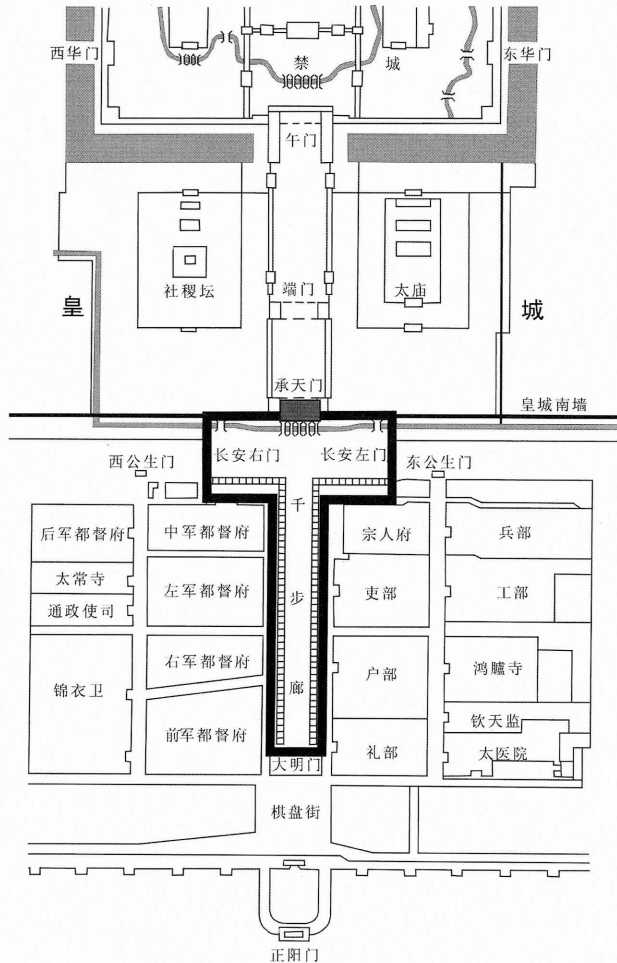


図5 明代北京城の宮廷広場

宮殿で行われ、皇帝自らが出題する試験)と呼ばれた。殿試が終わると、合格した「進士」一人一人の名前が殿上で呼び上げられ、合格者の名前が書き込まれた「黄榜」(訳注：黄色い紙が使用された。金榜とも言う)が午門に掲げられた。その後、黄榜はさらに楽隊に先導されながら天安門を抜けて宮城広場に入り、そこから向きを変えて長安左門の外に出て、そこに臨時に建てられた「龍棚」内に掲げられた。主席合格者の「元状」に引き連れられた進士たちが合格者名簿を見たあと、順天府尹(訳注：今の北京市長に相当)が元状に「金花」(訳注：合格通知書)を渡し、赤い絹織物を掛けた。その後、進士たちは順天府尹府での合格祝賀宴に招かれた。この一連の儀式は「金殿伝臚」と呼ばれた。科挙試験を受けた読書人は、一旦、金榜に名を連ねると、「鯉が龍門の滝を登る」ように、「一躍にして世に名だたる」権勢家となった。このため、宮廷広場の東の端にある長安左門は、「龍門」と呼ばれた。

宮廷広場の西の端に位置する長安右門の内側では、年に1度、「秋審」と「朝審」が開かれ、最高司法機関により全国各地で死刑判決を受けた犯罪人に対する再審、結審が行なわれた。長安右門から連行されて入ってきた犯罪人は、虎穴に入れられたと同然で、命の助かる見込みはほとんどなかった。このため、宮廷広場の西の端にある長安右門は、俗に「虎穴」と呼ばれた。

宮廷広場の北端の中央に位置する荘重な造りの承天門(天安門)が、皇城の正門である。門の前面には漢白玉石の石橋と華表(訳注：旧時の様々な事跡を記した石柱)が設けられていた。皇帝の「登基」(訳注：皇帝即位のこと)や「冊立」(訳注：皇后をたてること)など盛大な式典を挙行する際は、慣例に従って、承天門にて詔勅発表の儀式を厳かに執り行なった。承天門の内側、端門から午門の御道両側には、それぞれ六科の事務所が設けられ、皇帝を補佐して上奏文を処理し、吏部、戸部、礼部、兵部、刑部、工部等の各中央行政機関の業務を検査、監督した。午門は、紫禁城の正門である。どっしりとした造形で、コの字形をした城壁の上には中央に廊と殿を備えた建物が、両側には翼廊と樓閣が築かれ、全体として左右対称の配置構成となっている。俗に五鳳楼と呼ばれた。午門から皇極門(太和門)の間は、広々とした庭が設けられている。庭の中心を西から東に向かって内金水河が流れ、その上に造形美あふれる漢白玉石の石橋が架かっている。橋を渡ると、宮殿群への入口である皇極門が控えている。皇極門を抜けると正方形の広い庭に出る。庭の左右両側には背の高い樓閣が立つ。正面のひときわ大きな構えの建物が皇極殿(太和殿)である。皇極殿は一般に金鑾宝殿きんらんとも呼ばれ、皇帝が文武百官に接見する場所であった。重要な祭日、盛大な式典が催される時、皇帝はここで朝貢者に接見したり、盛大な儀式を執り行なったりした。皇極殿は紫禁城内の建物群の中で最も大きくかつ荘重な造りの宮殿である。幅63.96メートル、奥行き37.17メートル、高さ26.92メートルを有し、72本の円柱で支えられている。

皇極殿の背後に控える5棟の宮殿を含めて、前三殿と後三殿の2組の宮殿群に分けられる。6棟の宮殿群は全て広い基壇の上に築かれている。前三殿と後三殿の間を隔てているのが、乾清門である。皇極門の外側の東西両側には、文華殿と武英殿が建てられている。左右対称に建てられたこれら2棟の建物は、皇帝が大臣たちに会って重要な軍事や国事について相談したり、文学官からの侍講を受けたりする場所であった。このように、前三殿と後三殿以外の付属宮殿は、全て東西に設けられた回廊の外側に建てられていた。しかも、全ての宮殿建築は、建物の



規模から屋根の形式にいたるまで、一律に厳格な格式区分が設けられていた。紫禁城内の建物は、その使用目的と建てられる場所によって、異なる屋根形式が採用され部屋数も異なり、それによって主建築と付属建物が区別された。このことも、厳格に統一された宮殿郡に一定の変化をつける効果をもたらした。

古来の都城造営のしきたりに従うとすれば、皇居の左側に祖先を祭る太廟を置き、右側に土地と五穀の神を祭る社稷壇を置かなければならなかった。永楽18年（1420年）、承天門の東側に太廟が建てられ、万暦年間（1573－1620年）に再建された。太廟と東西相対する社稷壇は、承天門の西側に位置する。内部には中央が黄色、東が青、南が赤、北が黒、西が白という五色の土が配された。中央には土地の神と五穀の神である「社主」と「稷主」を象徴する石柱と木柱が置かれた。

清王朝の統治者は、明王朝の北京城をそのまま引き継いで使用し、一切変更を加えなかった。紫禁城内でさえも一部の建物を建て直し、局部的で小規模な増改築を行なっただけであった。しかし、清代初めの順治5年（1648年）に移城令が出されて、内城から漢人を立ち退かせ、外城に居住させた。移動を禁止された寺廟に住む僧侶や道士、それに移動の対象からはずされた八旗（訳注：清朝に忠誠を誓った満州人、モンゴル人、漢人からなる軍隊。各々8軍団に分けられた）に投降した漢人を除き、全ての漢族官僚および商人、住民がことごとく外城に移され、そこに居住させられた。同時に、決まりを設け、漢人の内城への出入は許可するが、宿泊は禁じるとした。一方で、旗人は俸禄を受け取り、生産に従事してはならないとし、全ての旗人を明代から残された住宅に居住させることにした。こうした民族隔離政策は新王朝の中期（道光年間）まで続き、その後、徐々に緩和された。このように、清代の北京城内の行政区分は満城（北城）と漢城（南城）の2つに分ける制度が採られた。

満城（北城）では、八旗が地区別に駐屯し防備する制度を実施し、各旗の満州人、モンゴル人、漢人の各軍を、それぞれ決められた居住区内で防備にあたらせ、混在を禁じた。満州人八旗の8つの居住区は皇城の周囲に隣接して分布し、漢軍八旗の8つの居住区は全て皇城から離れた四方の城壁に近い近郊に配置された。モンゴル人八旗の8つの居住区は、満州人軍の居住区と漢軍の居住区の間配され、民族間の親疎関係がはっきりと現れた。

内城の八旗の世界は、閉鎖社会であった。清王朝は、旗人に対して特別な制限を多く設けた。その主なものを挙げれば、次の通りである。八旗人の大人は妄りに自らの所属する八旗の居住区を離れて別の所に居住してはならない。城から20キロ以上離れてはならない。外地に出かけて商売を行ない、手工業に従事してはならない。旗人と一般人が財産を授受してはならない。旗人と一般人との通婚を認めない。旗人本人が一般人の子供を養子にとつてはならない。内城で劇場、畑作、車屋を営んではならない。さらに、旗人は外城に観劇に出かけることも禁止された。これらの規定は内城社会を閉塞させ、八旗人から活気を奪った。このことが、清代中期以降、八旗の生活の困窮を招く大きな原因の1つとなった。

閉塞した内城とは対照的に、清代の北京の外城は雑然とした社会であった。外城は、旗人以外の人々が暮らす場所で、外城には統一した規制が実施されなかったため、多様性に富んだ社会が出現した。民族的には、漢族のほかには回族などの少数民族も暮らしていた。階級的には、

宦官の名門から社会の最下層の貧民までが一緒に暮らしていた。戸籍上からみれば、全国各地から仕官の口を求めて集まる子弟や商人、職人、そして代々北京に暮らす人々などがいた。職業的にみると、読書人、職人、商人、医術、占い師、娼妓、役者、傭人、召使など、あらゆる職業の人々が暮らしていた。

こうした雑然した社会ではあったが、地区的にはそれなりに境界ができていた。しかし、内城のような階級的境界ではなく、外城は職業によって区分されていた。『郎潜紀聞初筆』の中の御史（訳注：監察官）巡城諺にある「中城は珠玉と錦織り、東城は織物と豆・穀物、南城は鳥肉・魚・花・小鳥、西城は牛・羊・薪・炭、北城は衣冠・盜賊」という言葉が、外城5地区のそれぞれの職業的特長をよく表わしている。さらに、『<sup>しんえん</sup>宸垣識略』は、正陽門大街の東側には「商人や職人の倉庫が軒を並べ」、西側は「商店、旅館、屋台の物売り、役者が集まっている場所で、東城に比べて賑わいがある」と、地区による業種の違いを記している。このほか、米市場、生花市場、生肉市場、豚市場、布市場、宝石市場、野菜市場、馬市場などの通りの名前からも、外城が職業別にまとまっていた様子が窺われる。これはいずれも社会発展が自然にもたらした結果であった。

清代における外城社会の大きな変化の1つは、会館の急激な増加と同業組合の発展である。統計によれば、明代に建てられた会館はわずか40軒であったが、清代に入り、その数が400軒あまりに増えた。これらの会館は、次の2種類に分けられた。1つが、殿試を受験する挙人（訳注：各省が行なう科挙試験の合格者）、転任や職を解かれた役人のために「宿泊場所」を提供する会館で、全体の80%以上を占めた。いま1つが、工商会館である。現在確認できる工商会館の数は、清代前期だけで30軒あまりあり、その多くが雍正、乾隆年間（訳注：1722—1795年）に建てられたものである。会館の発展は、北京外城社会に大きな影響を与えた。とりわけ工商会館は、数の上では「試館」タイプの会館に遠く及ばなかったが、同業組合という性質上、徐々にまとまった商業社会を形成するにいたった。

北京の地域開発に対する貢献という点でいえば、清朝は巨費を投じて北京城の北西郊外に、庭園を配した景勝地の開発を進め、壮大な規模と豪華さを誇る離宮宮殿を数多く建設した。これが、よく知られた北西郊外の「三山五園」、すなわち玉泉山の静明園、香山の静宜園、万寿山の清漪園（頤和園）、ならびに暢春園、円明園である。清の時代、北京の北西郊外では前人の建てた庭園を利用し、大規模な増築工事が行なわれ、数多くの離宮、別館が建てられ、庭園造営の全盛期を迎えた。康熙帝、雍正帝、乾隆帝の三代、前後130余年にわたって、この地に次々と帝室庭園が造営された。康熙年間に、まず暢春園が造られた。暢春園の北には、新たに円明園が造営された。さらに円明園に隣接して、長春園、綺春園（後に万春園と改名）が相次いで造営された。その後、瓮山（現在の万寿山）、玉泉と香山に、それぞれ新たに清漪園、静明園、静宜園が造営された。そして、これらの庭園の間を埋めるようにして、次々に王族、大臣たちの下賜庭園が造られた。清王朝の全盛期、この一帯東西10キロメートルの範囲に、帝室の庭園が踵を接するように造営され、空前の盛況を呈した。

清王朝の歴代皇帝は、この地で山水風景を觀賞したばかりでなく、国の政も執り行なった。このため、北京城内の紫禁城と並ぶもうひとつの政治の中心となった。清代に起こった多くの

重大な歴史的イベントは、いずれもこの辺り一帯の庭園と密接な関係があった。人々が清代の北京は南北「双城」制であったと言うのも、根拠のないことではなかった。

明・清時代の北京城配置計画の特色をまとめてみると、宮城が中心を占め、全城の平面配置構成を支配する1本の中心軸が存在することが最大の特徴となっていることが判る。明・清時代の都城形態は、元代が大都を造営した際に採用した『周礼考工記』の考え方を継承すると同時に、中華民族の文化的伝統と統治のための政治哲学をより明確な形に表わしていた。造営された北京城は、皇帝権力中心の原則に徹し、威風堂々とした宮殿群および真直ぐ伸びる都城中心線によって、皇帝権力の至高性と公明正大さを示した。哲学的には、「政は徳を以てする」、「中庸の徳たるや、それ至れるかな」（訳注：道徳の価値としての中庸は最高である）という思想を具現した。いわゆる「中庸」について、北宋の学者程頤は、「偏らずとは、之を中と謂い、易ならずとは之を庸と謂う。中は、天下の正道なり。庸は、天下の正理なり」と解釈した。北京城において、民族の哲学を建築様式に寓した見本を見ることができる。中心軸とそれを挟んで両側に対称に配置された建物群がまさにその良い例である。それらは、宇宙、変化、生成、均衡の思想を凝縮していた。建築様式は宇宙と均衡の概念を具現し、同時に、威風堂々と屹立する建物群の配置形式が皇帝の権勢を表わした。

中心軸の両側に対称に配置された建物群には、深い意味が込められていた。それらは、あたかも中心軸から伸びる両翼のように、都市の空間構成に落ち着きと整然とした規則性をあたえ、中心軸付近に配置された建築群の中心的役割を際立たせている。都城内部では、中心軸を中心としてシンメトリカルに並ぶ大小の建物群が人目を引くと同時に、建物群そのものも中央通路を中心に左右に建物を配置する対称性の強い建築様式を採用している。人事についていえば、皇帝が最高権力者として鎮座し、建築上は、都城中心軸の設計が皇帝権力一統の永久不変を具現化していた。都城内では、帝室の建物以外で多少の規模を有する建物は、住居、寺廟、邸宅、役所を問わず、また建築様式の変化にかかわらず、すべて中央通路の建築が不可欠であり、最も工夫が凝らされた。しかも、中央通路の格式は、つねに住む者の身分に相応したものでなければならなかった。

人々が君主の権力を擁護するというイデオロギーを守っていたので、都城は強大な絶対権力が集中する実体とみなされた。核となる小農経済は王朝の確固たる経済的基盤であり、君主・家長中心の価値観が文化的範疇の基本的内容であった。皇位制度はこうした条件の中から調和的に誕生したものであった。王朝の全ての臣民、とりわけ北京に住む臣民が重んじた規則、価値観、イデオロギー、信仰、行為が、調和と精緻な構造を備えた全体を生み出した。これら一切のことが、皇帝の儀礼活動と密接な関係をもっていた。名分教育と礼に基づく統治を重んずる国柄にあつては、国の定める大式典、祭典儀式の全てが王朝の政治的秩序を支え、目に見えない社会内部の軋みを防ぐうえで、絶大なる抑止力と強制力を発揮した。そして、大式典や祭典儀式の大半は、北京城内で執り行なわれた。それらの式典は、どれも例外なく正統性と権威性を特徴とするものであった。こうして、帝都としての北京城は、帝国全体を統御するに相応しい威厳と偉力を備えたのであった。

## 【参考文献】

(明) 蔣一葵：『長安客話』、北京古籍出版社、1980年。

(明) 沈榜：『宛署雜記』、北京出版社、1961年。

(清) 孫承沢：『天府広記』、北京古籍出版社、1982年。

(清) 呉長元編：『宸垣識略』、北京古籍出版社、1981年。

(清) 于敏中等編：『日下旧聞考』、北京古籍出版社、1981年。

(清) 『光緒順天府志』、北京古籍出版社、1987年。

(清) 陳康祺：『郎潜紀聞初筆』、中華書局、1984年。

侯仁之責任編集者：『北京歴史地図集』、北京出版社、1985年。

曹子西責任編集者：『北京歴史綱要』、北京燕京出版社、1990年。

呉建雍、王崗、姜緯堂、袁熹、于光度、李宝臣：『北京城市生活史』、開明出版社、1997年。

侯仁之責任編集者、唐曉峰副責任編集者：『北京城市歴史地理』、北京燕京出版社、2000年。

## 【要旨】

明清代の北京城は、元朝の大都城を基礎として新たに計画し直して建設されたもので、元朝の大都城を継承しつつ、さらにそれを改造したものであった。

明の成祖（明朝第三代永楽帝の廟号）朱棣は即位後、北平に遷都してここを北京と改めた。そして新北京城の建造という大事業にとりかかったのであった。北京城の建設は永楽四年（1406年）から開始され、永楽十八年（1420年）に基本的に完成、14年もの月日が費やされたのである。

明朝前期の北京城の輪郭は方形であり、宮城（紫禁城）の中心は南に偏り、その他の建物は皇宮（皇居）の周りを取り囲んでいた。そのため北京城全体は内から外に向かって大小不ぞろいな城壁が三重に取り囲み、その幾何学的中心は万歳山（今景山）の位置にあるという構成であった。

明代の北京城で最も傑出し、最も偉大であった建築群は、北京城全体の中心にあった黄金に光り輝く皇宮であった。皇宮の中央御道には6つの最も重要な宮殿が建てられていた。皇宮建築群の最南端、承天門（天安門）の外には“T”字型の宮廷広場があり、広場両側には朝廷の護衛所が集中的に配置されていた。これら中央行政機構は宮廷広場を通して宮城と一体となっていたのであった。

明朝中期には蒙古の騎兵隊がたびたび南下して北京の安全を脅かした。そこで北京城の防衛を強化するため、嘉靖三十二年（1553年）南郊外一帯を包囲する外羅城が建設された。本来の計画では北京の内城の周囲四方を取り囲むように外城を建設する予定であったが、財政不足のため南郊外の城壁を取り囲むだけのものになった。外城の建設により北京城の平面上の構造は独特な凸字型の輪郭をとるようになった。

外城の完成により、正陽門には南の永定門に向かって一本のまっすぐな大道が現れた。それは北京内城の中心御道の延長であり、これより北京城には南北に走る一本の中軸線が形成されたのである。この中軸線は永定門から北に向かって紫禁城の中心と景山の主要な峰を通り、最後に鼓楼と鐘楼で止まる、全長8

km近いものであった。この中軸線は北京城平面構造の中心であり、皇帝の住まいである宮廷の全城内における中心的地位を際立たせて、帝王の都としての設計思想を体現していた。中軸線及びそれによって作り出された東西対称の構造が北京城の平面景観における最大の特色である。

清朝の統治者は明朝の北京城を完全に引き継いで使用し、何の変更も加えなかった。紫禁城の中ですら、建築物の再建や修理、局所的な小さな範囲内での改造、増築作業を行ったのみであった。しかしながら、清朝は満州族と漢族の分離政策を採り、満州族は内城へ、漢族は外城へ住まわせた。これが原因で、清朝での北京内城、外城の社会生活上の特色は異なるものとなった。

その他、清代はかつて膨大な財力を投入して北京北西郊外に皇帝一族のための大規模な景勝地を開発し、空前の規模の非凡かつ華麗な離宮建築群を造営したのである。

## 【コメント】

金坂 清則

唐曉峰教授の発表は、元から明の帝都、次いで明から清の帝都となることによって、北京（北京城）が時の権力者によってどのように改変され、その都市プラン・都市構造がいかに変容したか、いわば都市プラン・都市構造の持続と改変・変容の実態を、歴史的・事実的に即して、歴史地理学・都市地理学的な観点から具体的に示したものである。的確な史・資料の活用と風水や都市制度への着目（当然のことではあるが）に加えて、コスモロジー論のような比較的新しい視座の取り込みを行うことにより、オーソドックスでありながら新しさもある、完成度の高い発表になった。図像資料を提示しつつ行われたために研究内容が大変わかりやすかった点と共に、高く評価される。

評者は、このような評価の上にとあって、本発表に対するコメントを、①考え方ないし理論、②資料、③外国人の研究という、相互に重なる3つの側面から行った。

①考え方ないし理論 唐教授は明・清の北京城の都市プラン・建築の中に民族の哲学がいかに具現されたのかという観点にたつて本発表を結んだ。このまとめ方はもちろん正当なものである。ただ、帝都北京城の特質を、比較の視点を導入することによって、少なくとも中国都市全体の中で位置づけるということも重要だろう。都市史的に見た時の中国の都市の多様性や、G.W. Skinner・斯波義信らによって体系的に論じられた都市の階層性が重要な論点になるからである。また、このような比較の視点の導入によって明・清北京城の特質とその歴史景観の今日的価値がより明確になりそれを都市整備に生かすことができると考えられるからである。第2に、都市史・建築史学や歴史学（日本の場合に比べれば関係がより強い）など隣接分野からの北京の都市史研究についての唐教授の見解の提示があったならば一層よかつたと思われる。学問分野間の越境・交流とそこでの歴史地理学の独自性の追求が、本研究のようなテーマにあってはとりわけ必要であるからである。さらに第3点として、世界で広く注目を集めてきている都市の歴史的景観の保全の問題が北京にあつても重要かつ緊急の課題であることからすれば、その前提として、北京城の歴史的景観が論理的にはどのように評価されるものなのかを研